

聖書：使徒 21：1～16

説教題：主のみこころのままに

日時：2014年7月6日

ミレトでエペソの教会の長老たちへの告別説教を行なった後、パウロの一行はエルサレムを目指してどんどん進みます。ミレトから出帆してコスに直航し、翌日ロドスに着き、そこからパタラに渡ったとあります。これらの町へ一日ずつパウロたちは移動したのでしょうか。そしてパタラに来た時、フェニキヤ行きの舟を見つけます。これは地中海を横断して一気にシリヤまで行く直航便です。パウロたちはこの船に乗ってキプロスを左に見ながら通過し、ついにツロに上陸します。

まず今日の箇所が記しているのは、このツロにおける出来事です。パウロたちはここに7日間滞在しました。この間、パウロたちはこの地に住む弟子たちを訪ねます。11章19節に「ステパノのことから起こった迫害によって散らされた人たちは、フェニキヤ、キプロス、アンテオケまでも進んで行った」とありましたが、その時以来の弟子たちの集まりがここにもあったのでしょうか。その彼らと会った時のこと。4節：「彼らは、御霊に示されて、エルサレムに上らぬようと、しきりにパウロに忠告した。」これはどういうことでしょうか。パウロはこれまで御霊に示されてエルサレムへの旅を進めて来たのではなかったのでしょうか。19章21節：「これらのことが一段落すると、パウロは御霊の示しにより、マケドニアとアカヤを通ったあとでエルサレムに行くことにした。」20章22節：「いま私は、心を縛られて（御霊に縛られて）、エルサレムに上る途中です。」おそらくこれはこういうことだと思われます。御霊はツロの信者たちを通して、エルサレムへの旅は危険なものとなることを改めてパウロに警告したのです。しかしそれを知った彼らがパウロに、大変だから上らぬようと忠告したのです。このような警告はこれまでもありました。20章23節：「ただわかっているのは、聖霊がどの町でも私にはっきりとあかしされて、なわめと苦しみ私が私を待っているとされることです。」パウロはこれまでの町々でも御霊によって、おそらくその地の信者たちを通して、エルサレム行きには苦難が伴うことを示されて来たのでしょうか。そしてエルサレムにグッと近くなったこのツロで、改めてこの警告を聞いたのです。しかもここで彼らは「しきりに」忠告したとされています。パウロは一層の覚悟と決心を持たされることとなったに違いありません。

滞在の日数が過ぎるとパウロたちは出発します。その時、多くの人々が妻や子どもと一緒に連れて見送りに来ました。たった一週間しか滞在しなかったのに、人々はパウロたちに深い愛情を抱いたのです。そして共に海岸にひざまずいて祈ります。先のミレトでの別れを再現するような光景です。そうしてパウロたちは再び船に乗ってトレマイへと南下し、兄弟たちのところへ一日滞在して後、さらに南下してカイザリヤへと着きます。

今日の箇所が記している第二の場面は、このカイザリヤでの出来事です。パウロはそこで伝道者ピリポの家に行きます。8章40節：「それからピリポはアゾトに現れ、すべての町々を通

って福音を宣べ伝え、カイザリヤに行った。」彼には預言する4人の未婚の娘たちがいました。しかしここで預言の働きをしたのはアガボという人でした。11章28節：「世界中に大ききんが起ると御霊によって預言したが、はたしてそれがクラウデオの治世に起こった。」このアガボはユダヤから下って来て何を述べたのでしょうか。彼はパウロの帯を取り、自分の両手と両足を縛って、「この帯の持ち主は、エルサレムでユダヤ人に、こんなふうに縛られ、異邦人の手に渡される」と聖霊がお告げになっています、と述べます。そこでその土地の人々はパウロに、これ以上エルサレムに進むことはやめるようにと言い出します。いや彼らばかりか、ルカを含むパウロの同行者たちまでもが、そう言い始めたのです。「これ以上進んだら本当に危ない。どうかここでやめてください。」と涙ながらに哀願したのです。

パウロにとってこの時はどんな時だったでしょう。ツロに続いてカイザリヤでも、人々は自分を引き留めようとします。しかも今回は同行者たちまでがそうします。これは決してパウロにとって小さなことではなかったことが13節から分かります。彼はそこで「あなたがたは、泣いたり、私の心をくじいたりして、いったい何をしていますのですか。」と言っています。すなわち彼の心は、人々の反応を前にくじけつつあった。人々の引き留めによって、エルサレムに進もうとする決心が弱まって行くのを感じていた。これは自然なことでしょう。彼自身、エルサレムに近づくにつれて、そこでの苦難が予想以上に厳しいものになるであろうことをひしひしと感じています。人間的に言えば、それはやはり恐ろしいことです。できればそこから逃れたいと思うのが自然な感情です。そうして内心は恐れる気持ちと人知れず戦っている時に、一緒に進んで来た仲間までもが「やめた方がいい」「やめましょう」と泣きながら訴えて来るのです。さすがのパウロも一生懸命自分の心をコントロールしようとしても、これではその決心もゆるむ方向に、くじける方向に傾き始めるのを覚えずにいらなかったのでしょうか。しかしさすがパウロ。彼はそんな自分の心の状態に気が付いたからこそ、はっきりとそれにノーを突きつけます。そして言います。「私は、主イエスの御名のためなら、エルサレムで縛られることばかりでなく、死ぬことさえも覚悟しています。」

このパウロと人々とのやり取りを見る時、何か似たような記事を思い起こさないでしょうか。その一つは、ペテロがイエス様の受難予告を聞いて、イエス様をいさめた記事です。ペテロは十字架を予告されたイエス様を引き寄せて、「神の恵みがありますように。そんなことがあなたに起こるはずがありません。」と言いました。そんな彼にイエス様は言われました。「下がれ、サタン。あなたは神のことを思わないで、人のことを思っている。」

もう一つはゲッセマネの外におけるイエス様の戦いです。イエス様は「できますならば、この杯をわたしから過ぎ去らせてください。しかし、わたしの願うようにはなく、あなたの御心のようになさってください。」と父なる神に向かって祈られました。イエス様にとっても苦難の道を進むことは大きな戦いでした。しかしイエス様は祈りを通して、苦難の道を選び取って行かれました。

もちろん苦難の道に行くこと、それ自体に意味があるわけではありません。大事なことは、

主の御心の道なら苦しみさえも厭わないということです。パウロはすでに主の御心を示されて来ました。19章21節で見たように、「御霊の示しにより、マケドニヤとアカヤを通ってからエルサレムに行く」ようにと導かれて来ました。迫害と飢饉のために貧しい状態に置かれているユダヤの教会に、異邦人教会からの愛の献金を届けることはどうしても必要なことであるとパウロは聖霊によって示されていました。彼自身としてはローマの教会を訪ね、そこから送り出されて西の果てイスパニヤまでの宣教を志していましたが、それよりもユダヤ人と異邦人の教会が一致を保つことを優先すべきこととして示されていました。ですから彼は今、エルサレムへ向かっています。そしてその旅には困難や危険が伴うことも前もって示されていました。ローマ書15章でパウロはまさにその計画について語っていますが、そこでエルサレムへの旅のためにローマ教会に執り成しの祈りをお願いします。15章30～31節：「兄弟たち。私たちの主イエス・キリストによって、また、御霊の愛によって切にお願いします。私のために、私とともに力を尽くして神に祈ってください。私がユダヤにいる不信仰な人々から救い出され、またエルサレムに対する私の奉仕が聖徒たちに受け入れられるものとなりますように。」困難があることは重々承知しています。またそれが本当に危険なものであることをだんだん強く示されて、祈りながら戦って進んでいます。なのに人々は「行かないように！」「進まないように！」「もうここでやめよう！」と言うのです。ですからパウロは言うのです。「どうかそう言わないで欲しい」「私の決心を鈍らせないで欲しい」「私はアガボが演じたように縛られることばかりか、エルサレムで死ぬことさえも覚悟しています。」と。

人々はこれを聞いてどうしたのでしょうか。14節に「彼が聞き入れようとしないので、私たちは、『主のみこころのままに』と言って、黙ってしまった。」とあります。彼らはパウロの姿に接して、主に従うとは何を意味するのかを改めて考えさせられたに違いありません。我々はいくらにも苦しみを避けることばかり考えていたのではないか。主は確かに自分の十字架を負ってついて来なさいと言われたのではなかったか。我々は神のことを思わず、人のことばかり思っていたことはなかっただろうか、と。その沈黙を経て、ついにエルサレムへと入って行ったことが15～16節に記されています。

私たちがまた今日の箇所を通して、自らの生き方を問われます。果たして私は苦しいこと、疲れること、犠牲を払わなければならないことがあったら、その道は避けるのか。それとも主が私に示しておられる道なら、進もうとするのか。私たちの生まれながらの性質は、苦しい道は避け、できるだけ楽な道、自分に益になる道を行こうとします。また周りの人々もそうアドバイスして来るでしょう。しかし大事なのは、他のクリスチャンの意見に耳を傾けつつも、やはり神と私の関係の中で私の歩みを決めて行くことでしょう。聖霊は私たちに示してくださるはずです。救い主イエス・キリストを知り、この方に感謝し、この方に従う者として、あなたはこの道を行くように！と。日々の生活の様々な状況で、聖霊はそのことを示してくれるはずで、その道は犠牲を払うことが必要な道かもしれません。苦しむことが必要な道かもしれません。その時、私たちは問われるのです。私は果たして苦しみは回避し、都合の悪い主の招き

には従わない人生を通すのか。それとも主と共に重荷を担い、御国の完成のために共に仕える歩みをささげて行くのか。主が招いてくださっている道であるなら、それは主と共に歩む道であり、主が助けてくださる道です。またそれはすでに主が歩いてくださり、最後は栄光へとつながっている道です。苦難は栄光に至る通路です。14章22節：「私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない。」 ですから私たちは究極的な安心を頂いて、この道を進んで行くことができます。

パウロは大きな苦しみ待ち受けていることを繰り返し警告されても、主の御心の道に行くことを自らの喜びとしました。また人々はパウロの姿に接して、主に従う歩みは苦難をも乗り越えて行くべきものであることを改めて思わされました。私たちも自分の歩みを振り返り、正しい道へ進みたいと思います。主の招きを退け、自分で自分のいのちを保ち、主の祝福から外れて行く人生となることがないように。主に従い、主に倣う歩みの中で、主から力と恵みを受け、御国のために用いていただく真に意味ある人生、幸いな人生へ導かれて行きたいと思いません。